



## マドンナは、大規模な L-Acoustics コンサートサウンドシステムをフィーチャーしたリオのビーチコンサートで160万人のファンを集め『Celebration Tour』を締めくくる



© Bruna Prado/AP-SIPA

### 2024年5月

「マドンナは同じ環境に快適さを求めるタイプなので、彼女のサウンドをミキシングする際の第一の課題は、毎回、各ステージで彼女の体験を正確に再現することです。」と語るのは、マドンナFOHエンジニアのバートン・イシュマエル (Burton Ishmael) 氏。彼は、『Celebration Tour』がロンドンのO2アリーナで開始された2023年10月14日から、160万人も集め、5月4日にリオで行われた「単独のコンサートに集まった史上最大の観客数」とPollstar誌に評された記録的なショーまで、スーパースターのミキシングを担当しました。

『Celebration Tour』は、Clair Globalの傘下にあるEighth Day Soundが供給したK2システムで世界中のアリーナを回りました。リオで開催されたフィナーレは、サンパウロを拠点とする音響会社Gabisomが、122台のLA12Xと90台のLA8アンプリファイド・コントローラーに加えて2台のP1プロセッサでドライブされた、172台のK1、80台のK1-SB、96台のK2、128台のSB28、68台のKS28、59台のKaraと21台のX8を含む延べ624台のL-Acousticsエンクロージャーによる巨大なシステムを提供しました。熟練したチームは、L-Acoustics Soundvision モデリングソフトウェアの力を借りて、サウンドシステムのデザインにおいて予期せぬ課題をもたらした海辺でもこの複雑なセットアップを見事に成し遂げました。

「正直、Soundvisionがなかったら、課題を克服することができなかったと思います。」とイシュマエル氏は語ります。

「ビーチの詳しいレイアウトや、会場の正確な位置もわからなかったので、一人当たり0.4平方メートル×何百万人も人数を考えて必要なスロー能力を計算するしかありませんでした。計算で出てきた数字をSoundvisionに入れ込んで、全体のシミュレーションを行うことができました。Soundvisionがなかったら、まったく不可能だったと思います。」

それらの正確な計算により、イシュマエル氏とシステムエンジニアのアンディ・フィトン (Andy Fitton) 氏とクルー・チーフのフランク・ピーポーズ (Frank Peoples) 氏はこの複雑な会場に適応したデザインを作成することができました。「音を反射する壁がないことを覚悟していましたが、さらに海辺における温度の変化を想定することも必要でした。昼間は暑く、夜になると少なくとも10～15度は冷え込むことがあるうえに、音を偏向させる可能性を持つ風も大きな懸念



© Brandon Ishmael





事項でした。」とイシュマエル氏は説明します。「それに加えて、空気中の塩分と海霧も難題で、自然との闘いでした。コンサートのサウンドシステムに多くのパワーを詰め込んだのは、そのためです。そういえば、アンプリファイド・コントローラーの多くは海岸に打ち寄せる波からわずか 30m のところにあったのですが、海岸のアレイを問題なくしっかりとドライブできました。」

特にシステムのディレイタワーは、設置場所と台数の印象的なセットアップでした。4 台の K1SB、8 台の K1、4 台の K2 と 8 台の KS28 による 8 つのステレオタワーが浜辺にそって配置されました。「ディレイタワーを機能させるには、大気の変動や距離を考慮しなければなりませんでしたが、Soundvision の Autoclimate や Autofilter のようなオートソルバーツールのおかげで、この規模でも容易に管理できました。そして、FOH から約 800 m 離れたタワー・スピーカーのキャリブレーションに使用されたワイヤレス・マイクのアンテナが、これらのシステムを最大レンジまで伸ばしてくれました。」とフィトン氏は語ります。「Soundvision のディレイ・マッピング・モードは、これを正しく行う上で非常に重要でした。また、SPL ターゲットで中低域のパターンを視覚化する機能は、約 100 m のスロー距離でシステムの全体的な均質性を達成するのに必要不可欠でした。」

もうひとつ懸念されたのは、マドンナがショーの最中に歩き回る 3 つの大きなキャットウォークでした。「アリーナと違って、ビーチは、機材を吊り下げることができる屋根やグリッドシステムがなく、困っていました。」とイシュマエル氏は語ります。「その課題を克服するために、メインスピーカーを 3 つのキャットウォークに跳ね返らないように、その下に設置し、Kara と X8 によるアップステージフィルを追加しました。そうすることで、キャットウォークを FOH のサウンドから守りながら、VIP エリアに素晴らしいカバレッジを提供することができました。」

『Celebration Tour』のクルー・チーフとして、ピーボーズ氏はリオのショーではチームワークが不可欠だったと語ります。2019 年のローマ法王フランシスコのパナマ訪問の音響システム・クルーの一員でもあったピーボーズ氏は、このような規模の制作の難しさを熟知しています。「なるべくスムーズに実現できるよう、みんなが力を合わせました。L-Acoustics のクリス・サリバン (Chris Sullivan 一通称 Sully) とアレックス・ソト (Alex Soto) は、システム設計の専門知識を提

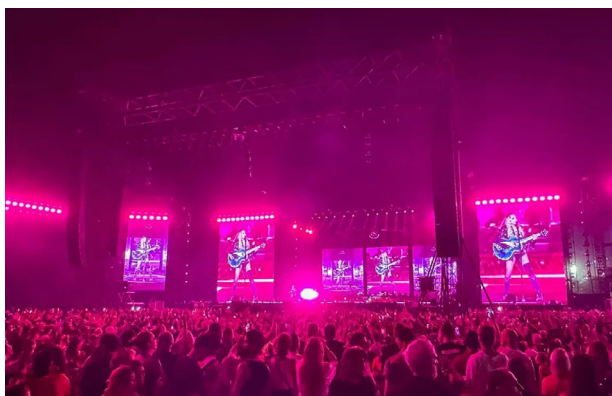
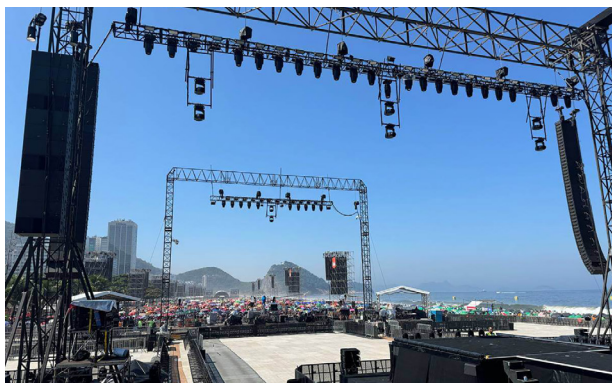


© Brandon Ishmael

供し、どんな質問にも答えてくれました。そして、K シリーズのスピーカーは、サウンドが必要な場所に届き、かつ良い音を出すために必要なスローを持っており、カバレッジと忠実性に関して何の心配もありませんでしたが、サリーさんとアレックスさんはこのショーを成功させる大きな要因となりました。」

イシュマエル氏によると、『Celebration Tour』のコンサートサウンドシステムの設計には、膨大な注意と労力と時間が費やされたといいます。リハーサルはブルックリンのサウンドステージで始まり、ツアーが始まる 1 年前にはナッソー・コロシウムで行われました。それでも、ビーチでのファイナルショーは、そのスケールと挑戦という点で特異なイベントでしたが、L-Acoustics のテクノロジーは、そのような難題を見事に克服するためのツールをチームに提供しました。

「私は完全に期待通りに満足しています。スピーカーとアンプは非常によく機能してくれました。システムのどこで何が起こっているのか、いつでも監視できることは、安心を与えてくれました。そして、音も、ショーの最初から最後まで、L-Acoustics に期待した通りの卓越したものでした。」



© Alex Soto



左から右へ：クルー・チーフのフランク・ピーボーズ氏、L-Acoustics クリス・サリバン、FOH エンジニアのパートン・イシュマエル氏、L-Acoustics アレックス・ソト、システム・エンジニアのアンディー・フィトン氏 (© Brandon Ishmael)